

# 保育における幼児理解のあり方 —保育学科学生の幼児理解の実態分析を通して—

椋島 香代\*

Key Words: 保育, 幼児理解, 保育者の専門性, 保育者養成

## I. はじめに

子どもの育ちをめぐる問題は様々な場面で取り上げられ、議論されてきた。少子化問題への対応だけでなく、子どもの心身の健やかな育ちが十分に保障されていないのではないか、ということも社会全体が問題としつつその具体的な方向転換が大変難しい状況が続いている。また子どもの育ちを支える家庭の教育力低下や地域社会の崩壊が指摘されながら具体的解決策は見出せていない。その中で戦後教育の見直しと教育の更なる充実を図るという旗印の下、平成18年12月教育基本法が改正された。ここでは幼児教育の重要性が明文化された。幼児期のもつ特殊性、重要性が国をはじめ社会にも再認識されたといえる。幼児期に特に関係が深いと思われる条文は以下のようなものである。

(家庭教育)

第10条 父母その他の保護者は子の教育について第一義的責任を有するものであって、生活のために必要な習慣を身につけさせるとともに、自立心を育成し、心身の調和のとれた発達を図るよう努めるものとする。

- 2 国及び地方公共団体は、家庭教育の自主性を尊重しつつ、保護者に対する学習の機会及び情報の提供その他の家庭教育を支援するために必要な施策を講ずるよう努めなければならない。

(幼児教育)

第11条 幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであることにかんがみ、国及び地方公共団体は、幼児の健やかな成長に資する良好な環境の整備その他適当な方法によって、その振興に努めなければならない。<sup>注1)</sup>

---

\*人間学部児童発達学科

第 11 条で幼児教育を基礎教育として明確に位置づけると同時に第 10 条では家庭の教育力を重要視し、養育機能の向上等をサポートすることの必要性を示した。

教育基本法の改正を受け、様々な審議を経て平成 20 年 3 月に幼稚園教育要領及び保育所保育指針が改訂された。これまでの保育は主に幼稚園、保育所という管轄の異なる施設運営によって成り立ってきた。特に保育所は児童福祉施設として養護機能を中心に保育されてきた。しかし教育基本法第 11 条によって幼稚園、保育所共に教育機関としての性格が明確になり、保育所が児童福祉施設としての役割のみならず、教育機関としての性格を今まで以上に意識しなければならないこととなった。保育所保育指針には養護と教育の二つの側面から保育のねらいと内容が定められた。また保育課程、保育計画の充実が求められている。更に幼稚園においては学校評価が導入されるなど、その保育のあり方の見直し、外部への説明等が求められている。幼稚園・保育所共に保育者は自らに課せられた職務を改めて意識し保育のあり方を見直す必要がある。さらに教育基本法第 10 条 2 項に示すように保護者の子育てを支援するという役割も重要な位置づけとなった。保育者の職務は広範囲にわたり、様々な資質を要求されているのである。

このような状況を保育者養成の立場からはどのようにとらえ、対応すべきであろうか。幼稚園も保育所も「保育する」場である。子どもたちの健やかな心身の発達を助長することである。現在の幼稚園・保育所には子育て支援や地域貢献も課されているが、何より重要であり、根幹となるのは「保育」である。保護者に対して保育内容、子どもの成長の道筋などについて説明する責任も伴っている。保育の充実なくして、その説明責任を果たすことはできない。保育そのものの充実を図るために保育者の保育技能や保育そのものに対する資質を向上させるべきである。幼児教育の基本は「環境を通して」行うものである。適切な環境を用意し、子どもの主体的な取り組みを促していく。子どもの主体性を引き出すために子どもの実態を把握することが欠かせない。いわゆる幼児理解である。本稿では保育する上で最も基本となりまた重要な幼児理解について取り上げ考察する。

## Ⅱ. 研究方法

本稿では、以下のような手続きで研究を進める。

- 1) 保育における幼児理解について考察し、重要な側面を仮説的に導き出す。
- 2) 学生のレポートを分析し、保育経験の殆どない者の幼児理解の実態を把握する。
- 3) レポート分析の結果を踏まえ、保育者の幼児理解の深まりについて考察する。

## Ⅲ. 保育における幼児理解とは

岡本<sup>1)</sup>は、大人は幼児期の特殊性を認識した上で子どもにかかわることが重要であると述

べている。保育とは、子どもの発達の様相や個性を捉えながらその子らしさを引き出し成長を助けていく営みであるといえる。大人が教え導くというより子どもの視点や立場に寄り添いながら下支えしたり共に歩むことである。幼稚園教育要領に「幼児期における教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり、幼稚園教育は、学校教育法第22条に規定する目的を達成するため、幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本とする。<sup>注2)</sup>」また保育所保育指針に「保育所は、その目的を達成するために、保育に関する専門性を有する職員が、家庭との緊密な連携の下に、子どもの状況や発達過程を踏まえ、保育所における環境を通して、養護及び教育を一体的に行うことを特性としている。<sup>注3)</sup>」とあり、適切な環境を用意し子どもがそこにかかわることで成長・発達することを重要視している。保育者には保育者が主体になって「教える」「指導する」よりむしろ子どもの「主体的取組」を促しながら個々の成長・発達にとって必要な体験ができるよう「援助する」ことが要求されている。子ども自身が自ら意欲を持ってかかわるような環境を構成することが必要なのである。河地<sup>2)</sup>は、自信を持って環境にかかわる力を持つ子どもは学習への動機付けも高い、またその動機付けの形成には教師のかかわりの影響が大きいことを明らかにしている。教師は、子どもの興味・関心の方向や様々な能力の発達状況、パーソナリティなどを把握しながら「子どもにとって」魅力的な環境を構成しなければならない。保育において幼児理解が大変重要であるのはそのような理由からである。幼児理解と保育という営みは常に関連しあい連動しているのである。

筆者は自らの現場経験、また保育現場との共同研究などを通して保育における幼児理解について以下のように考えている。保育における幼児理解には二つの側面が必要ではないかということである。一つは「臨床的理解」、もう一つは「教育的理解」である。「臨床的理解」とは対象の子どもそのものを丸ごと受容的に受け止め今ある状態をそのまま受容的に理解する共感的理解、子ども一人ひとりをかけがえのない存在として認めその発達の道筋も捉える個別的理解などを包含している。その際子どもの家庭環境を背景とする生活体験、パーソナリティ、発達の様相、など多面的に理解することも重要である。子どもの基本的情報と言い換えてもよい。保育者が子どもを「臨床的理解」によりその子の存在を受容し、認めることで子どもが外界、すなわち園の環境に能動的にかかわり育っていくための基盤が形成される。ハーロウやエインズワースなどによっても指摘されたように探索行動の発現には子どもの情緒の安定、身近な大人との良好な関係が左右する。また鯨岡は<sup>3)</sup>保育者が子どもの主体的行動を受け止めくり返し認めることが心のつながりを育むとしている。保育者は子ども一人ひとりの気持ちを捉えながら子どもが居心地の良さ、安心感を持てるよう配慮していく。子どもの側からみると安心できる場を提供し受容的に自分にかかわる保育者は愛着の対象となる。「臨床的理解」は園生活の基盤となる子どもの情緒の安定や保育者との信頼関係を構築する上でも欠かせないものである。

「教育的理解」とは、「臨床的理解」から更に発展して子どもが成長・発達に必要な体験を

できるよう個々の状況に応じた環境構成や援助を考えるための資料となる視点である。前述のように幼児期の教育においては、子どもが自ら育っていく過程を大切にしそれを援助することが重要である。子どもが主体的に取り組む場や活動を用意するのみならず、その活動にかかわる動機付けとなる配慮を行い、さらに子ども自身が好きで繰り返し取り組んでいる活動を注意深く観察し、そこから子どもの中に何が育ち、どのような経験・学習が行われているのかを把握するのである。柏木<sup>註4)</sup>は「乳児は知的好奇心を持ち外界との交流を求める積極的存在である」「子どもは自ら学び、自ら育つ力をもつだけではありません。その力を発揮できたとき、子どもは最高の満足と自己有能感をもちます。そして、さらに新しい活動を展開していきます。」と述べている。このような子ども本来の姿を引き出し、育つ力を援助するための視点が筆者の述べる「教育的理解」である。「教育的理解」は保育者自身が問題意識や課題に照らして視点を意図的に設定し、課題解決に必要な情報を収集する。観察主体として機能することが求められる。何よりもまず自分の視点の固定化や偏りを認識し、省みることが重要である。

また保育者が子どもをみるとき、保育するという目的が常に付随している。収集した情報を解釈し、考察して保育のための様々な手立てを導き出す。具体的には主体的かかわりを引き出す環境を構成する、遊びの充実や生活の安定を図る、それぞれの子どもに対する適切な援助方法を導き出すなど具体的な方略を検討するためである。「教育的理解」には、単に子どもの観察による子どもについての資料収集のみならず、その解釈や保育を組み立てる上での考察をも包含していることになる。「臨床的理解」は、保育現場においても十分に認識され実践に生かされている。ここでは主に保育実践力と密接にかかわる「教育的理解」について取り上げて考察していきたい。

幼稚園・保育所の現場では様々な保育形態が存在するが、子ども自身が活動を選択する自由遊びと学級など集団で同じ活動を行う設定活動に大きく二分される。子どもが自由に活動を選ぶ自由遊びは、個々の活動の充実と必要な体験を提供していくために大切な場である。また学級全体が同じ活動を行う設定保育においても担任の活動展開の下、学級の子どもたちが同じ経験をするようになるが、その中でもその取り組みの姿によって個々の子どもの体験の質や成長の過程は異なるはずである。保育者は集団の中の個を捉えることを意識しなければならない。様々な場面で子どもを観察し理解することは、幼稚園・保育所における生活全般を通して子どもの育ちを促すための理解である。この理解を下に指導計画は立案され保育実践は行われるべきである。

また「教育的理解」については今日的課題も包含していると考えられる。それは保育所では特に今後意識して取り組まなければならない課題であるということである。これまでは児童福祉施設として養護機能を重要視してきた。「臨床的理解」を大切にして子どもに寄り添ってきたのである。しかし、今後は先に述べたように教育の要素が明確になったためこれに加えて「教育的理解」についての必要性を意識すべきではないかと考える。保育所保育指針の中でも、指導計画の立案とそれに基づいた保育展開が求められている。また幼稚園においてもとすると一

日が設定活動の連続であり、子ども主体の活動が殆ど保障されていないばかりか、十分な幼児理解がされないまま教師主導の展開も見受けられる。このような園では自由遊びは設定活動と設定活動の間の文字通り時間調整であり、安全面だけを配慮し教育的配慮は殆どないある意味放任の時間となっている。子どもの育ちや活動を捉え援助する視点を見直していく必要がある。漠然と「幼児理解」として議論するのではなく、「臨床的理解」「教育的理解」の二つの側面を意識しながら後者に焦点を当てることでより妥当性の高い保育の意識化や自己評価・反省を行うことができると考える。

#### Ⅳ. 保育場面における「教育的理解」の様々な様相とトレーニングの必要性

先に、幼児理解は「教育的理解」の側面を意識することが重要ではないかと述べた。「教育的理解」は観察して事実を捉えるというだけではなく、その事実の解釈や考察も含んでいることが特徴である。ここではその点について、検討を試みる。

実際の保育場面において子どもを観察する際、いくつかの特徴が存在する。第一は、保育者は担当している複数の子どもを同時に「みる」ことも要求されることである。このことは、保育現場では「子どもを把握する」といわれ、子どもの安全確保にも欠かせない重要な営みである。また、一人の子どもにかかわる時には他の子どもへの注意の向け方に差が出てくる。このように保育者は様々な状況に対応するため、一人の子どもだけのある一定時間継続的に観察することが難しい。これらのことから保育者は必要ときに必要な場面を瞬時に切り取り観察しなければならない。保育場面という様々な要素が絡み合った状況を観察する時に、保育者の視点が明確でなければならない理由はここにある。事実を捉えるという場面において保育者間で個人差や特徴があるともいえる。

第二に、経験年数を経ることである程度保育技術は向上するが、それらを子どもに適切に適用できるかどうかは保育者の「教育的理解」に関連している。「子どもをよくみること」の重要性は保育現場でも認識されているが、みたことをどのように解釈し考察したか、ということを保育者間で話し合い吟味されることは少ない。子どもに受容的にかかわることは保育の基本であるが、保育者にはここからもう一歩進めたかかわりも要求されている。子どもの成長・発達を助ける教育的配慮である。幼児理解が「臨床的理解」のみに留まっていると保育についての十分な吟味がされないままになってしまう。子どものことで問題意識を持ったり、援助に悩むとき、子どもについて得た情報の解釈や考察によってその解決策につながることも多い。よくみるというだけでなく何を見てそれをどのように処理するかということ重要なのである。事実(子ども)をありのままに捉えて容認するだけではなく、その事実を解釈したり考察するのである。保育者が保育の中の様々な現象を考察する力を持つことが保育の質の向上には欠かせない。

第三に、子どもの遊びが継続しない、遊びが見つけれない子どもが多い、学級活動の際に

どもに落ち着きがない，など保育に問題が顕在化した場合には保育の見直し，振り返りが特に必要であるが保育現場において保育を第三者にみてもらいコメントをもらう機会は少なく，保育者自身が自力で問題の解決を迫られることになる．その際，目の前でくりひろげられる現象に対する分析的視点と自らの援助とを関連付けて考察しなければならない．事実を十分に捉えきれていないのか，事実をよみとる自分の解釈は妥当であるか，自分の環境構成や援助は適切であるか，など保育者が自身の「つまづき」がどこにあるのかを明らかにすることで問題解決の糸口をつかみやすくなる．「教育的理解」の構造をつかんでいることによって問題の本質に迫ることが容易になる．

このように，保育者は自らの幼児理解の状態を自己評価しさらには「教育的理解」の側面を意識しながら「子どもをみる目」を磨いていく必要がある．

## V. 学生の幼児理解の実態

これまでは，保育における幼児理解について考察してきた．では，保育者は幼児理解の方法をどのようにして身につけていくのであろうか．保育経験のない学生の幼児理解の実態について分析する．

### 1) 本学保育学科における指導

幼児理解の重要性と中でも特に「教育的理解」についての保育者の研修の必要性について述べてきた．養成の段階でも学習の場が設けられなければならない．本学では学生に生の子どもの姿にふれる機会を意図的に提供してきた．その中心となるのが実習の授業である．

保育学科では1年次後期から4年次まで3年半にわたって免許・資格取得のための実習の授業が位置づけられている．特に平成16年度に行われたカリキュラム改正で保育実習，教育実習を連続して位置づけ，連続して整合性のある指導が行えるよう配慮した．初めて現場実習（保育所）に出る2年次夏までの事前指導である『保育実習Ⅰ』は現場に適応し最大限の学びを得られるよう丁寧に進められている．1年後期から2年前期の1年間にわたる事前指導が行われている．この中ではできるだけ生の子どもの姿に触れ，現場になじむことも含まれている．付設幼稚園，保育実践研究センター，現場を撮影したVTRを利用して学習が進められる．保育実践研究センターにおける観察はその一環である．『保育実習Ⅰ』の授業内で1年後期，2年前期それぞれ一度ずつ学生は保育実践研究センターを訪問する．初回は1年生後期に乳幼児の姿にふれその個人差や様子を見て驚きや感動，子どものおもしろさを感じてもらうことを目的としている．2度目は2年生前期である．現場実習が目前に迫っていることもあり，子どもの行動観察や記録の書き方をトレーニングすることが目的となる．今回の分析対象は2年生前期に行った2度目の観察レポートである．レポート課題は以下の2点であった．

①同じ乳幼児を20分以上継続して観察し記録を作成する．その乳幼児の興味の方向とどこに遊びのおもしろさを見いだしているかを考察する．

②自分で観点を決め、それにそって観察し考察する。

課題のねらいは次のようなものである。

課題①は、教員が観点を提供しそれについて考察することで乳幼児についての理解を深める。観点を明確にして行動観察記録を検討することで子どもについての理解が深まることを実感させたい。また、記録を書いて考察することで子どものおもしろさ、保育のおもしろさや難しさに気づかせたい。

課題②は、自分で問題意識を明らかにし必要な情報を得るための観察を行うことである。保育現場では主体的な取組みが要求される。保育についての反省・自己評価も欠かせない。自らが問題意識を持って保育に取り組む必要があるのである。実習場面においていわゆる指示待ちでは十分な学習をすることができない。自ら課題を探し取り組む姿勢を育成するための活動でもある。

なお、課題を学生に伝達する際、意義やねらいを併せて伝えることで、学習に対する動機づけを強化したり現場実習においても応用し生かせるよう配慮している。

## 2) 学生実態分析の意義

ここでは、保育に初めてかかわろうとする保育学科2年生のレポートを分析することにより、その特徴を明らかにする。2年生前期は、保育についての専門科目が開設され保育についての学習が進められ保育についての理論・知識が培われる時期である。しかし、保育現場は未経験である。学生は保育についての初心者であり子どもを見る目が未熟な状態であると考えられる。このような保育の入り口に立った状態の学生の幼児理解の実態を分析することで、保育者が保育専門職として持つべき視点、研修すべき資質について明らかにしたい。特に実践経験のない学生は「教育的理解」の必要性を認識していないため、その視点が欠けていると推測される。「教育的理解」の実態を把握することで保育者としての専門性がどのように向上していくのかを考察したい。学生実態と保育者として持つ視点との相違を明らかにすることで保育者の専門性に迫りたい。

また学生の観点設定に注目した場合、それらは一般的にどのような保育者でも容易に設定しやすい観点ではないかと考える。「多面的」と抽象的なとらえではなく設定された視点の具体的な内容に注目し、どのような側面からとらえやすく逆に捉えにくい側面は何かを明らかにする。

## 3) 学生レポートの分析方法

レポート分析の手続きは以下のようなものである。

2年次の保育実践研究センターにおける乳幼児の観察レポートの分析

<対象> 2年生レポート 123部

研究協力者4名によって分担して分析された結果を筆者がすべて見直し、不一致のものについては再検討後筆者がまとめた。

<分析方法>

- a. 課題①（同じ乳幼児を20分以上継続して観察し記録を作成する。その乳幼児の興味の方向とどこに遊びのおもしろさを見いだしているかを考察する）について

行動記録にてらして行われた考察について分析を行う。0～2歳児の発達的特徴を加味し、子どもの興味の方向、遊びのおもしろさそれぞれについて記述内容を以下の視点で分類し検討する。

玩具など物的環境に対する興味

母親や学生、子どもなど人的環境に対する興味

探索行動、興味の持続時間など興味のもち方

- b. 課題②（自分で観点を決め、それにそって観察し考察する）について

観点について分類し、その特徴を考察する。

- c. 課題①②共に保育に関して考察されたレポートを抽出しその内容を検討する。

これらの分析結果を踏まえ、実際の保育現場で必要とされる視点等について考察していく。

## VI. 結果と考察

### 1) 行動観察をもとにした学生の考察について

子どもの遊びの興味の方向や遊びのおもしろさを考察する、という課題は行動観察をして考察する観点が明示されていることである。しかし、行動観察記録を作成しても考察ができていない者が11名いた。これは全体の8.9%にあたる。行動の意味づけで終わり更にそこから子どもについて何が言えるか考えることができていない。行動観察＝事実を捉える、行動の意味づけ＝解釈するということがいえ、解釈で止まっているケースである。また、考察が行われているレポートにおいても興味の方向と遊びのおもしろさという2点それぞれについて分けて考察されていない。遊びの状態について記録からわかったことを導き出している。記録をみて考察する際、その視点が漠然としてしまうのである。これらのことから学生にとっては明確な問題意識をもちそれにそって具体的な子どもの姿を具体的に捉えながら考察することが難しいことがわかる。

保育者は観察・記録を詳細に行ったとしてもその資料から何を得るのか、解釈や考察を行うことができなければ保育に生かすことはできない。「子どもをよくみる」という漠然とした表現ではなく、観察と考察をそれぞれ意識化させることで学習を深めることができると考えられる。

### 2) 遊びについての考察について

学生のレポートの実態から、課題であった興味の方向及び、遊びのおもしろさについての考察を厳密に分けて分析することが難しいことが判明したので、レポートを再検討し分けることはせず記述全体を分析した（図1）。その結果は以下のようにまとめられる。



- ①玩具など物的環境へのかかわり，母親をはじめとする大人とのかかわりや子どもとのかかわりなど人的環境について述べたものが多い．中でも物的環境については玩具の色や形，音などその応答性に注目したり，子どもの玩具の使い方についての考察が多くみられる．保育現場にあるものや，教材に関しての考察は具体的であり容易であることがわかる．しかし考察を更に進めて，玩具を使った遊び方を観察してその子の特徴を探ったり子どもの玩具の使い方をとらえることはなかった．幼児教育は遊びを通して学習するとされているように保育において遊びの質についての考察が欠かせないが，遊びの内容を捉えることができていない．「遊んでいる」という概念的な捉え方に終始しがちになってしまっているのである．

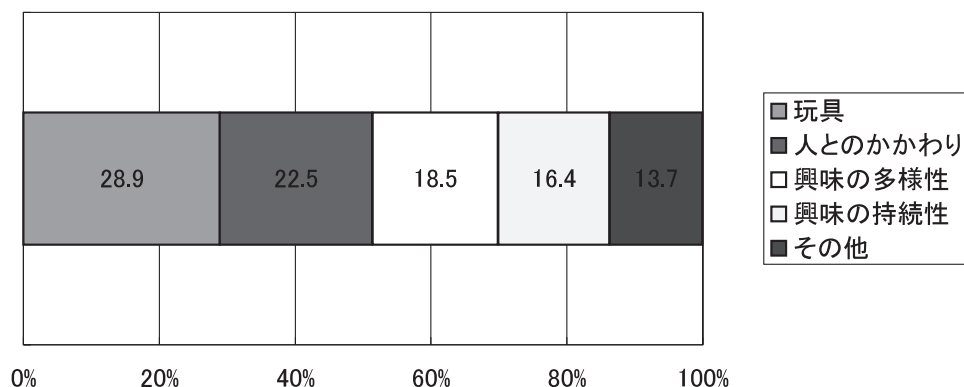


図1 課題①にみられる考察の内容

- ②人的環境については保護者（ここではすべて母親）との関係性についての考察が多くみられる．愛着の実態や母親が子どもの情緒の安定の大切な要因であることに気づいている．しかし，やり取りをして遊んでいる様子をつかみとり大人のかかわりの質が子どもの遊びに影響していることを述べたケースはない．
- ③子どもが沢山のことに興味を向ける，子どもの視線が終始あちこちに動き探索している，など「興味の多様性」について取り上げた者も多い．このことと関連して，子どもの遊びが短い時間で次々に移り変わることや一つの遊びが短時間であること「興味の持続性」についても考察されている．3歳未満児は集中時間が短い．様々な遊びを次々に行う子どもの姿からその子をどう捉えるかということは3歳未満児のめまぐるしく変化する行動からよみとることが難しい．
- ④遊びの中で運動機能を生かして自分の能力を使う喜びを感じ取る，試行錯誤したり，挑戦している姿などを考察している記述は合わせて13.1%である．教員が本来遊びのおもしろさとして気づいてもらいたかった側面である．2年生にとっては高度な内容であることがわかる．このような内容で考察している者の行動観察記録を詳細に検討すると，遊びの状態を細かく見て「色々なやり方をしている」「何度もくり返し取り組む」「(積み木を) そうとつんで倒れないようにしている」など遊びの姿を行動レベルで捉え記録に残している．他ではある

玩具をさわる、〇〇（玩具名）で遊ぶ、というように概念でまとめてしまっている。

課題を持っていても子どもの行動を観察し課題に沿って考察することが保育経験のない学生にとっては難しいことがわかった。事実を捉える際、行動レベルで記録することは後の解釈、考察に具体性をもつこととなる。

保育者が記録する際にその内容を吟味することで事実の把握の様相が明らかにできるのではないか。また記録する記述内容を意識し、検討することで事実の把握に対する精度があがるだろう。観察する際に子どもの行動の捉え方にも保育者間で個人差があり、観察技能によっても考察が左右される。観察方法のトレーニングも欠かせないことがわかる。行動レベルで記録することが課題となる。保育現場では他者に保育を検討してもらうことが難しいと述べたが、保育記録を検討することによって保育者の現場における子どもの行動の把握の実態を捉え、その解釈、考察について討議することが可能になる。保育記録の活用方法を具体的かつ戦略的に検討すべきである。また、行動観察についても記録を互いに吟味しあうなどして同じ状況をどのようにみたか記録したかということも検討する必要があるだろう。

### 3) 学生の観点設定について

保育現場においては、他者に保育を検討してもらうことが難しいと述べた。自らが問題意識を持って子どもと向き合うことが重要である。あらかじめ観点を明確にして子どもを観察し、かかわることで自らの保育についての振り返りを確実なものにすることができる。学生に観点を自由に設定させたのはそのような保育現場の実態について感じ取らせるためである。

課題②学生個々が設定した観点をまとめた（図2）。

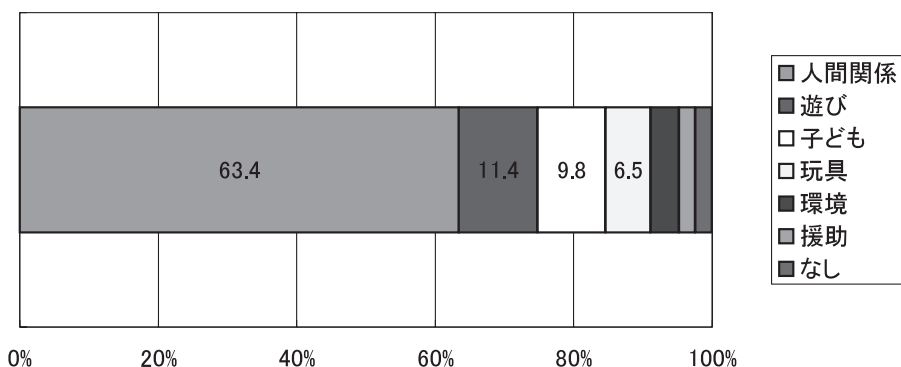


図2. 学生の観点設定

子どもの周りの人たちとのかかわりについて観察した者が63.4%である。このうち約6割が「他者」として特に相手特定しないが、残りの約3割が母親のとのかかわり、1割弱が同年代の子ども同士のかかわりとしている。人間関係については学生自身も日常生活の中で考える機会の多い問題であることや、大学における授業でも子どもの発達に周囲の人間のかかわりが重要であることなどをくり返し学習していることなどが多かった要因であろう。また、観察

前のオリエンテーションで母親と子どもの自然な姿を見ることができるとも保育実践研究センターの特徴の一つであることを説明したことも母子関係に注目した学生が多かった理由ではないかと考えられる。

次に遊びについて取り上げた学生が全体の11.4%であった。遊び始めのきっかけ、年齢による遊び方の違い、男女の遊び方の違い、など遊びの質を捉えようとする観点もみられた。また遊びと学習、一人遊びから育つものなど子どもにとって遊びの意味を捉えようとする者もあり、保育者として遊びを見るための視点を持っている学生もいることがわかる。子どもの特徴について表情、視線、運動発達などに注目して観察した者が9.8%である。一方で環境設定(4.1%)、子どもへの援助(2.4%)など保育運営にかかわる側面については観点として少数である。2年次の学生は子どもについての理論的知識は持ち合わせていても実体としての子どもの姿を見て感動したり学習内容を確認するということが中心で、徐々に保育する対象としての子どもの理解について意識しつつある段階であるといえる。

この課題については「自分で見たいことがみられてとてもよかった」という感想がある一方で「自分で決めることが難しかった」「結局無難な内容に落ちてしまった。次回はもう少し考えたい」などの感想もあった。学生にとっては自分で課題を持ち取り組むということから既にハードルになりうることを示している。

保育者が日常の保育の中でその日の観点を具体的かつ明確に設定し、その観点にそって事実を捉え必要な情報を収集すると、保育の考察が深いものになり保育技術や技能の向上に大きく貢献する。視点をもって子どもを観察することのおもしろさ、子どもが興味深い対象であることを認識していることも保育者としての大切な資質であるといえる。しかし、学生の段階ではまだこのようなことを認識することが難しい。保育者間でも視点に特徴や偏りがある、理解の深さに個人差があるなど問題をはらんでいるものと推測できる。保育者研修のあり方など工夫していく必要がある。また保育者養成の段階では、この子どもという対象の理解について様々な視点から学生に動機付けすることが必要である。

#### 4) 保育に関する考察について

課題①②の全体を通して保育者として必要な資質や保育と関連づけて考察したレポートを抽出した。子どもの観察を通して、保育方法等について考えることが保育における幼児理解では重要な側面である。筆者がこれまでに述べてきた「教育的理解」はそこまで包含したものである。保育者としての自分が何をなすべきかという課題を意識化して初めて保育が始まると言っても過言ではない。学生のレポートでは23本あり、これは全体の18.7%にあたる。しかし、記述は短いものが殆どであった。その内容について例をあげながら考察し以下にまとめた。

- ①「保育の環境としては、子どもの興味を引くようなものを、子どもの視野に入りやすいところに置いておくことが大切だと思った」「探索行動が活発になる時期なので、子どもが触ってみたいくなる色形など視覚から興味を持つことができ、動きのある遊びができるものを随所においておくといいと思いました」「月齢にあわせたおもちゃを保育室に用意しておくのは

とても大事なことなんだと改めて実感しました」などの環境構成についてとりあげている。3歳未満児の子どもにとって視覚刺激が探索の要因となることに気づき子どもの探索行動を引き出す環境づくりの重要性に気づいている。

- ②「(乳児はおもちゃを) 触って確かめているようだったので、この時期に様々な質感のものに触れさせてあげることが必要な、と思った。同時に誤飲など安全面には特に注意が必要な時期だと改めて思った。」「(略) 子どもはじっとしていないということである。そのことをよくわきまえて観察実習や現場実習に望みたい」「何でも口に入れてしまうので、玩具の大きさや口にいられても安全なものであるかをきちんと考えてあげる必要がある」など安全面に対する記述。授業の中では子どもの安全や衛生については何度もくり返し取り上げられているが実際の子どもの行動観察を通して実感している。このような実感は保育者としての具体的行動につながりやすいと考えられる。
- ③援助について触れている記述もある。「(一つの玩具で長い間遊んでいた子どもを観察して) このような子には保育者は下手に干渉しないというのも一つの手であると思った」「(現場スタッフが玩具の扱い方を援助した) 違う場所で自分で方向転換していたのが、子どもが保育スタッフから学んだということにつながり、こちらでは手助け・援助しただけでも子どもにとっては学習となっていることに気がついた」「周囲の援助によって、更に遊びは展開されていくので、一人ひとりに相応しい援助が必要であると考える」保育者は保育場面で子どもを観察する際には自分ならこの子とどうかかわるかという視点で事実を捉え考察することを同時に行っている。客観的理解だけでなく、保育者と子どもとの関係の中でその関係性を発展させる、子どもを援助する方略を導くという営みである。保育現場実習を経験する前にこのような視点も萌芽している学生が存在している。
- ④保育者としての資質や態度についての気づきもある。「先入観を強く持ったり何か始める前や始めてすぐに色々なことを考えすぎずにもっと広い視野を持っていかなければならないと思いました」「子どもたちが自分でどうしたらもっと楽しむことができるのだろうかと考え、実行し、検討する流れが行われているのであれば、危険や人に迷惑をかける様子がない限りその遊びを止めたくはない。なぜなら、子どもが興味を持って始めた遊びは持続する。そして自らいろいろな事を考えるきっかけにもなる」「(大人が) 子どもと気持ちを共有し、表情や体全体で気持ちを伝えることが重要であり、何よりも一緒に子どもの目線で遊びを楽しむことが大切である」保育者は、常に自分の保育や子どもへのかかわりを反省・評価することが大切な資質である。謙虚で誠実な保育者としての態度を認め、育てることも保育者養成においては重要な課題であると考えられる。

「教育的理解」における解釈、考察の面で学生は未熟な状態であることが明らかになった。自分は保育する立場にある、という保育者としての主体性を意識させながら、子どもを観察することの意義を繰り返し取り上げていく必要がある。また、学生に育ちつつある「教育的理解」を細やかに拾い上げフィードバックし、具体的に保育を考える機会を提供していきたい。

保育現場では、「教育的理解」が指導計画へと発展していく。指導計画の中では、「教育的理解」は幼児の実態として書かれることが多い。ここでは事実を取り上げて記述されることが多いが、保育者の解釈や考察をあえて書き込むことで、指導計画の根拠や連続性を意識しやすくなるのではないかと考える。

以上、学生の保育に関する考察についてまとめた。現場を経験する前段階においても、学生個々で幼児理解には個人差があった。これは個々の保育者の幼児理解の特徴を理解する上でも有効であると考え。保育の質の向上や、保育者の資質向上を考える際、保育者自身の幼児理解の実態をまず把握することが有効な手段であるといえる。

## Ⅶ. まとめ

保育における幼児理解について考察してきた。幼児理解には「臨床的理解」と「教育的理解」という側面があり、「教育的理解」には事実をとらえる、解釈する、考察するという様相が含まれることを明らかにしてきた。学生実態を分析した結果、「教育的理解」は保育者自身が認識する必要があること、意図的に養成されなければならないことではないかと思われる。「教育的理解」を深めるために保育者が身につけるべき課題は次のように分類できる。①観察技術を身につける ②保育にかかわって適切な観点を設定する ③観察したことをもとに考察する ④考察を保育援助等に生かす である。この4点を窓口保育者が保育の自己評価を行うことで、さらに「教育的理解」を深めることができるのではないかと考える。自らの保育を言語化し、分析することは指導要録・保育要録作成や学校評価などの点においても求められる資質である。

学生実態においては事実を捉える段階から個人差があり観察技能のトレーニングも重要であることがわかった。保育学科においては第三者としての客観的観察と保育するという前提で子どもを観察することの質の違いを意識して指導する必要があるだろう。

一方現場においても研修会等に参加した際に幼児理解の側面では保育者それぞれで非常に個人差があることを経験的に実感している。上記の課題はそのまま現場でも適用可能であると考え。現場にいったん出してしまうと、日々の保育運営に追われその根本的基盤となる幼児理解そのものについての反省や検討が難しくなる。養成するための研修方法を検討すること、また現場においても保育方法を窓口保育者側の側面について討議する場を設けるなど保育者の資質向上の取組みが課題である。今後は、保育者と共に研究的視点を持つことで保育の根本に位置する幼児理解について更にその構造化、保育への生かし方等を検討したい。保育者の幼児理解の実態についても分析を試み、その研修のあり方を検討すると共に、学生指導の面では学生の現場観察の際の記録や考察を授業内でフィードバックして検討する機会を設けるなどその資質向上に努めたい。

引用文献（注で示した）

- 1) 「教育基本法」平成 18 年 12 月，法律第 120 号
- 2) 「幼稚園教育要領」平成 20 年 3 月，文部科学省告示第 26 号
- 3) 「保育所保育指針」平成 20 年 3 月，厚生労働省告示第 141 号
- 4) 柏木恵子「子どもが育つ条件－家族心理から考える」2008 年 7 月，岩波書店，p.158,1.7-8,1.11-12

参考文献

- 1) 岡本夏木「幼児期－子どもは世界をどうつかむか－」2005 年 5 月，岩波書店
- 2) 河地和子「自信力はどう育つか」2003 年 2 月，朝日新聞社
- 3) 鯨岡 峻「〈育てられる者〉から〈育てる者〉へ」2002 年 3 月，NHK ブックス

〈謝辞〉

レポート分析に協力してくださった平成 19 年度梶島ゼミ卒業生にこの場を借りてお礼申し上げます。

(2008.12.10 受理)